

第1回 名古屋市新たな劇場の整備・運営等検討懇談会 質疑応答及び意見交換議事録

日 時：令和6年3月19日（火）午後3時30分～午後5時30分

会 場：名古屋市公館レセプションホール

出席者：懇談会委員5名及びオブザーバー1名

事務局5名

（詳細は末尾「出席者名簿」のとおり）

1 進行

- ・座長選出
- ・会議の公開
- ・資料説明
- ・質疑応答及び意見交換
- ・閉会

2 質疑応答及び意見交換（事務局による資料の説明終了後）

福島座長

（議事(1)、議事(2)について）

ただいま説明の資料内容について質問等があれば出してほしい。

論点であるが、新たな劇場の基本的な考え方や機能構成等に問題あるいは違和感がないか、また、さらなる提案や踏まえるべき視点はないか、などどなたからでも結構なのでご発言をいただきたい。

林委員

クリエイティブ産業をより活発化するには、ソフト施策やヒューマン施策が重要なのはもちろんだが、まずはアーティストやスタッフのコンタクトポイントをつくらないと始まらない。昨年10月の「金山駅周辺まちづくりシンポジウム」では「数より種類を揃えると良い」という話があったと聞いた。

例えば「文化版インキュベーション施設」(p.18)は、新しい市民会館の目玉になる。交流機能を持つ施設は、居室のように結界があると良い場合、パブリックスペースと緩やかに繋がっていると良い場合、あるいは他のクリエイターと同居していると良い場合…それぞれあり、第1・第2ホールの利用者と設計者と意見交換しながらつくっていただければと思う。

またそこには、育ったアーティストの活動継続を支えるための、文化芸術をマネタイズできる人材が必要。ここ数年、名古屋にもフリーランスの制作者が増えてきたように思うが、アーティストだけではなく、制作者や舞台技術者にも開いた施設にして、CLNや市事業団なども交えて、文化芸術のエコシステムを促進する機関やオルグウェアをつくれると良い。

一つお願いしたいのは、アーティストやスタッフを育成するということは未来に向けて投資をするということと同じであり、施設運営者の自発的な事業として一任するのではなく、設置者からの委託業務として行うなど、財源は分離しておいたほうが良い。

劇場スタッフの育成については必要性も必然性もあるが、アーティストの育成については大学との差別化が求められる。仮に劇場がアカデミーの役割を担う場合には、地元の専門教育機関と意見交換するなどして慎重に制度設計するべきである。

いずれにしても、次世代の人材を、オール名古屋（つまり、行政・教育機関・CLN・市事業団・文化小劇場を含む各文化施設）でどのように育成するか、上位計画でグランドデザインすることで、さらに大きな効果が生まれると思う。

梶田委員

大学の立場から発言すると、大学が担う人材育成といっても、制作者・技術者・アーティスト等と多様であるが、自戒を込めていうと大学側もオープンではない面があり、それが劇場側に人材育成の現状が届いていない。また、音楽だけではなく演劇・ダンス等と芸術領域も多様化しており、各分野で人材育成の形態も取組も、活動の仕方等も異なるため細かい制度設計が必要である。こういったことから、具体的に活動を起こすときに大学も協働できればより効果も高まると考えられる。芸術家・アーティスト等と一口に言っても、作曲者も演奏者も編曲者もいて、それぞれに目指すところや立場、思考、目標やゴールがある。その細分化された対象ごとに人材育成のパスを整理してみてはどうか。他の地域でこういった取組はほとんど見られず、活動を整理する際に大いに参考になると思われる。

遠藤委員

貸館事業に取り組む民間事業者の関心事は、何をおいても、どういったホールになるのかということ。市民会館再整備は、50年前に共用した現施設で対応できない部分を見直すだけでなく、新たなニーズに合わせて新しい物を作るよい機会である。

金山は良い立地のわりに鉄道から下車しないまちであると言われている。駅前との一体的な開発、白鳥センチュリーホールとの連携等で、金山を若者が集まる街に変えることが必要。

勝又委員

「基本理念・基本方針等」(pp. 14, 15)は重要なページであるが、やや多岐に渡り過ぎ、詰め込み過ぎの感がある。今回の新たな劇場整備で解決すべき課題を絞り込んだほうがよい。すべてを解決することは困難で、すべてを解決しようとしめないことが肝要。基本方針の内容をもう少し整理した方がよい。

現状で不足するものという、まずは練習施設だろうか。新たな劇場では、練習施設等で文化芸術の作り手を集めることも必要であるし、文化芸術に触れていない人もふらっと来てちょっと集まれる機能・施設も必要でありそのバランス感をどうするかである。

アマチュアの練習施設があつて、それがロビーに面して見える作りのホールが増えている。北上市文化交流センター「さくらホール」、津市久居アルスプラザ、長久手市文化の家…アクティビティが周囲からも見える施設が必要。以上3点について提示したい。

福島座長

詰め込み過ぎない、という話が出たが、3つの基本方針を実現するにも他施設との役割分担や機能分担が必要。役割や機能が同じ方向性でも新たな劇場という場所づくりに意味を見出すのか、も

しくは新たな劇場の担う新たなジャンル役割を探すべきかである。

林委員

空間としての練習室という観点では、競合相手は公民館や区役所のホールとなる。劇場の練習室は、それらの中にどういった有機的連携を組み込むのか、また制作者や技術者をどう絡めていくか…。新たな劇場の練習室は、おそらくスペックの高い施設で、それなりの利用料金になるであろうことから、付加価値化や差別化策を考える必要がある。

各ホール利用状況の図 (p. 12) でも示されているが、愛知県芸術劇場には中ホール規模施設が無く、必要に応じて他のホールを借りて、公演を実施することもある。2024 年度についても芸術創造センターで音楽と演劇を融合させた公演を予定している。同じ名古屋市内にある県施設と市施設で弱みを補い合って、強みに変えていければと思うし、利用者や観客等にとっても選択肢が広がることは良いことである。

遠藤委員

貸館として使う身としては、ホール間連携よりも、愛知厚生年金会館、愛知県勤労会館の閉館による大きなしわ寄せにどう対処するかということ。使い勝手の良かったホールが名古屋市内からなくなり、名古屋市公会堂を 1,500 人規模にただけでは追いついていない。公会堂はステージが狭すぎる。今の市民会館は利用率を見ても国内トップクラスのホールで、3 つのホールを整備するのは重要な価値。

詰め込み過ぎないとのことだが賛成。これもあれも施設に入れていくと、結果として多分使い物にならない施設になる。やりたいことも詰め込み過ぎると逆効果。先程のご発言、なるほどと思った。まずは地に足をつけ出来ることから進めていくことが必要。

梶田委員

ホール有機的連携の図 (p. 15) をみつつ、普及啓発の観点からいうと、名古屋市は文化小劇場でアウトリーチ活動の第一歩を行っているものの、その次の活動や場がない。人をより深く活動に誘うには、次に芸術創造センターや青少年文化センター「アートピア」、さらに次に市民会館…といった形で名古屋市の特徴を生かしたつながりを作って活かしていくことが必要で、新たな劇場整備はそのいい機会ではないか。また文化芸術活動とともに、それを支える鑑賞者育成も重要。詰め込み過ぎとの指摘はそのとおり。単独で考えるのではなく連携することで充実を図っていく観点が必要。

福島座長

市民会館の役割を全体のホールのなかでどう位置付けていくかのアプローチが大切。高稼働の背景には市内ホール閉鎖があるが、なぜ閉鎖に至ったのかの背景を理解し市民会館で一定の受け皿を作ることが必要。きちんとしたボリューム・規模感のホールとするとともに、ホールの特徴づけにおいては演目ジャンルの絞り込みが重要で、絞り込みによる名古屋の特徴づけを、リスクをとって行うのか、それとも多目的に対応するのかの判断が必要。

勝又委員

各ホールの演目ジャンルをある程度決め、ターゲットにするしない、対応するしないを整理すべき。県芸大ホールの花道は年1回程度、長久手市文化の家もオケピ利用はこれまで1回のみだそうで、これらの機能ははっきり切り捨てるという考えもある。実際の利用は、計画段階とは異なり、ほとんどが多目的となるし、またそれに対応できる。公会堂的な利用も可能だし、国立劇場大劇場も歌舞伎以外の利用時は花道を無くせるため多目的に使うことができる。ロイヤル・フェスティバル・ホールでも、ロイヤル・オペラ・ハウス改修時にはオペラもバレエも上演した。演目を絞り込んで作っても心配しなくてもよい。

福島座長

現市民会館では式典等利用が全体の3割あり、こういった面でも便利に使われている。新たな劇場でこういったニーズにどう対応するかも検討が必要。

林委員

市民やまちに開くということで、施設の内外でたくさんのイベントをやりましょうということだが、イベントの実施にあたっては、規模の大小に関わらず、一定のスタッフ・機材や設備・経費等が必要となる。また、施設の中には他のイベントを実施している主催者、施設の外にはテナントや近隣施設、住民などたくさんの占有者がいる。どうしたらみんながハッピーになれるかについて、事前の仕組みづくりが必要。

福島座長

市民に開くイベントはそれを支える立場もある。見る、演じる、支えるという立場もある。そういった立場も非常に大切、その場としての市民会館。アートイベントを市民が支える活動として、例えば演奏家のホームステイの動きなどもある。イベント頻度があがると、それを支える多くの人が必要となるが、それを主体的参加のチャンネル増加の機会ととらえることが必要。

梶田委員

芸大学生といっても全員がアーティスト志向ではなく、作る側に関心がある人が少なくないが、どこでそれが体现できるかの情報には恵まれていない気がする。ロンドンの小学校では、芸術活動イベントのもぎり、チラシ作りなども子供に役割分担し一つの活動を作り上げる取組をしている。演奏するだけが芸術活動ではないという提示が役割。

小澤征爾の「セイジオザワ松本フェスティバル」見学時に、会場で料理を提供する人に話を聞いた。彼はクラシックを聴いたことがないがイベント自体が好きで参加しているとのこと。それも芸術活動への参加形態の一つである。

福島座長

(議事(3)について)

後半の論点は、3つのホールの役割や事業方針、金山駅周辺のエリア的な施策展開、マネジメント等であり、どなたからでも結構なのでご発言をいただきたい。

林委員

3年間かけて議論された基本構想を下敷きに、内容をさらに洗練させたと想像するが、自主事業の部分がスリムになった印象。基本構想時点では、「自主事業区分と内容」という表現で4つの方針が示され（p. 41）続いてその具体的な「イメージ」が表された上で「具体的な内容は…引き続き検討を進めます」となっていた。

先程の「詰め込みすぎない」という話もあり、また基本計画は実現可能性も必要なので、構想で表されていたイメージ全てが書き込むことは難しいだろうが、今回資料の「事業展開イメージ」（pp. 35～37）は計画の肝でもあるので、もう少し噛みくだいて整理し、名古屋市が何を目指しているかを明確に伝えるものとしてほしい。

特に、「普及・育成事業」と「交流・まちづくり事業」は、新しい市民会館を特徴づけ、市の総合計画にもある「魅力と活力にあふれるまち」を実現させることができる事業であるため、ここに大きな期待を寄せるところ。

また、運営組織や広報宣伝についても、基本構想では「専門性を持った人材の配置」について言及されていたが、その部分の記載がなくなると、専門性を持った人材の配置を諦めたと誤解されるので、しっかり折り込んでいただければと思う。

事務局（岡田）

基本構想より内容を後退させたわけではなく、基本計画では施設整備をさらに検討するとともに事業方針のイメージづくりを実施。専門的人材に関しては次回懇談会等で議論したい。

遠藤委員

基本構想時の懇談会では、市民会館と県芸との役割分担として市民会館はポピュラリティある演目対応がよいという議論があった。県芸ほどの格式がなく広く使いやすいものを市民会館では考えた方がよい。これは現在の施設特性でもあり、これはきちんと継承したほうがよいのではというのが個人的意見。ただし、新たな施設整備によっておそらく利用料金が数倍になるとすると、新たな劇場がアマチュアも使えるものになるかも気になる。

基本的にはきちんと施設単体で事業採算がとれるように事業運営をしてほしい。赤字も投資と考えればよいとも思うが、赤字が税金投入によって頻繁に補填されるような状況は、いち市民としては納得しがたい。利益が見込める興行を優先的に考えてほしいという意見である。

福島座長

近年閉鎖された名古屋市内のホールの中には、採算性の悪化を契機としたものもあったであろう。ホールは一定を公共が支える必要はあると思うが、どう支えるか…例えばクラウドファンディング的な金銭的支援の仕組みもある。文化事業に対しては、それが肯定されうるような社会の醸成も必要だろう。また企業協賛なども含め、企業が社会貢献要素も込みで文化芸術事業にアプローチできるようにすることも必要。

勝又委員

自主事業で採算をとるのは一般的には難しい。採算性は度外視して市民に届けたいコンテンツを提供するというで納得してもらうことになる。公共ホールは赤字体質と言われると言われる

が、劇場が儲かるということはない。劇団四季の劇場のようにプロが自前の箱で自主事業をすれば可能であろうが。収益優先での運営はどんどん（良くない意味での）大衆化していくのも課題。自主事業に関する愛知県芸術劇場の状況について林委員に説明、意見等お伺いしたい。

林委員

自主事業だけで事業採算性を成立させるのは確かに難しい。県芸では、全収益の4分の1は貸館の利用料金だ。稼ぐところで稼いで、普及育成に循環投資する仕組みである。そういった自主事業は、一定の行政関与が必要であり、民間に丸投げして実施すればよいという話にならないように仕組みを考える必要がある。

梶田委員

何のために普及啓発を図っているかの先の目標を、常に見据えておかないといけない。市民県民の生活が豊かになるとして納得してもらわざるをえない。若者がそのアートで生計を立てるためには鑑賞者を育成、または鑑賞者の目を開かせること、文化芸術に関心の高い市民を醸成することが必要。自主事業はそういった循環を創出するための第一歩であり、循環を作り出すためにも専門人材育成・アーティスト育成・鑑賞者育成など多面的な取組が必要。

「名古屋飛ばし」が話題になって久しい。学生など若い鑑賞者は東京大阪に遠征するが、金銭的な制約もあるので弾丸バスツアーを使ったりしているそうだ。つまり若者の関心や行動が東京大阪に流出しているということで、それを食い止めることが必要であり、その面でも循環創出がきっかけになるとよい。卒論で「名古屋飛ばし」を扱った学生がいて、彼女の結論は「名古屋は名古屋市内で完結させる傾向があるので、他地域と連携し、市外の資源を取り入れることも必要」でなるほどと思った。

福島座長

市民アンケートや世論調査によると「住みやすい名古屋」と言われるように、比較的どの項目でも満足度が高い結果になるが、名古屋に対する不満として「芸術文化」が出てくる。特に若い女性が働き楽しむ場所がさらに必要であり、市の施策として芸術文化を守り高めることが若者の社会流出を減少させるという共通認識が必要である。

遠藤委員

「名古屋飛ばし」は言われるほど邦楽アーティストでは行われていない。公演のかなり前から会場確保が必要となる外国タレントや、ロングラン公演を希望する劇団等で名古屋飛ばしが多くみられる状況だ。県芸は長期間利用に対応が可能な条例があるが、それでも10日間や1カ月間を占有することは難しい。そういった運営面を見直さない限り、名古屋飛ばしは永遠に発生する。

林委員

一体開発なので一体運営が良いというのが一般的な考え方であり、それを真っ向否定するつもりはないが、一体運営するには、誰がイニシアチブを持つか、という課題がある。芸術的感覚と経営的感覚を持つ強いリーダーはごく少数であり、属人的な運営になることによって、その人がいなくなったら急にうまくいかなくなるという危険性を孕んでいる。

そもそも、第1・第2ホールのように（既存ユーザーを対象とし）オペレーションが評価される組織と、第3ホールのように（新しいまちづくりを目指し）イノベーションが評価される組織の両方のかじ取りするのはかなり難しい。管理運営する組織もだが設置者である名古屋市の評価体制もシンクロするように設計していただきたい。税金投入を前提とした取組とし、持続的な市のコミットメントを期待する。建物がある限り市のコミットメントはなくなる。

いずれにせよ、名古屋市にはすでに蓄積された知見があり、基本構想でも「全市的な事業運営体制の構築」について検討するとあるので、クリエイティブ産業における人材のグランドデザインを、文化芸術推進計画の中で謳っていく必要があると思う。

福島座長

「新たな劇場に期待される効果」（p. 25）については、効果発現に何が必要かについてバックキャストにより検討する必要がある。文化芸術活動をマネタイズするためには、「アート×●●（何か）」が必要であり、そういったものをどう作っていくかが大きな課題である。

福島座長

金山のまちづくりについて。アスナル金山は通過型のまちを変え、祝祭的空間…行けば何かある空間を作りだした成功例と考えているが、アスナル金山を閉鎖し再開発するという考え方自体大きなチャレンジ。ただ今回、第3ホールが駅前に位置付けられることで、駅直結の場所で多様な活動を取り込み、第3ホールが金山で芸術文化に触れる機会創出を担うことが期待され、その意味で第3ホールの役割は重要である。

外観でいえば、第3ホールが再開発施設内に取り込まれ、外部からホールの存在が確認できないようだと、文化芸術の雰囲気滲み出しが起きない。渋谷ヒカリエのようにボックスを積み上げるような形状、動線のなかで透過的に文化芸術活動が垣間見える空間、第1・第2ホールの演目情報をリアルな場所で提供…などの工夫や取組があって初めて機能する。

各エリアの連携（p. 31）とともに、第3ホールと第1・第2ホールをどう繋ぐかも検討課題である。

勝又委員

第3ホールは、劇場の形が外から視認でき、広場に向けて開放しているとすると、目指すイメージとして（民間ホールではあるが）立川ステージガーデンかと思う。立川ステージガーデンも同じくホールの姿が広場と一体的に確認でき、施設の一部を開放して広場と一体的に使うことも可能。立川ステージガーデンはほぼ平床でコンサート利用中心だが、市川中車ら一座が歌舞伎上演をしたように（和モノ専用の機構等がなくても）案外多用途に使えるものである。

遠藤委員に伺いたいのが、第3ホールは高い需要が期待できるホールになりそうか。

遠藤委員

名古屋市内の類似施設としては ZEPP NAGOYA であろうが、ZEPP は高稼働率であり第3ホールも高稼働が期待できる。他ホールより採算的にもよいものになるのではないかと。

福島座長

第1ホールと第3ホールの中の視認性確保のため、金山総合ビル街区のオープンスペース化によりビスタを作っていく考えだが、県芸も同じく久屋大通・栄オアシス21を前面に抱くという設えである。公園や広場をまちづくりにどう活用していくかが課題であり、後ほど林委員からご意見を伺えればと思う。

遠藤委員

アスナル金山にも音の問題があった。どんなイベントでも大きい音が出ると周囲からクレームが来た。こういった問題を解決しないと何を企画しても成功しない。文化芸術活動を好きな人が周りにいないと活動を守れない。デビュー前に横浜駅前で歌っていたゆずや大阪のコブクロに対して周りが「うるさい」と発していたら彼らは売れなかっただろう。こういった問題に寛容なテナントを誘致する、地域や町内会と事前によくすり合わせる等が必要。

福島座長

今のご指摘はエリアマネジメントと密接に関わってくる。金山のまちづくり像をきちんと住民に説明しファンになってもらうことが必要。再開発ビルのプロパティマネジメントにも芸術文化を生かしていく等のWin-Winの関係を作っていくことが必要。

林委員

愛知県芸術劇場の取組としてご紹介できるのが、2018年にスタートした、「久屋ぐるっとアート」というアートフェスティバル。久屋を中心とした栄北エリアの文化・観光・商業施設が協力し、11月上旬にアートイベントを集中して開催するもの。

このイベントの特徴は、「自律・分散・協調」という考え方で、実行委員会のように組織だって企画運営するのではなく、時期を定めて、それぞれができる範囲内で、それぞれのやり方で実施するというもの。一つひとつのイベントやスポットは、ユーザーも異なり、自律・分散していますが、「みんなつながってる」と寄り添う気持ち（つまり協調）が、栄北エリアの一体感を醸成し、栄をもっと楽しいまちにできる、と私たちは考えている。食べる物も着る物も、新しい組合せで可能性が広がるように、アートも街も、新しい組合せで可能性が広がる、という考えで、また、無理なく続けられるよう「緩やかな連携」の声掛け役として、当劇場が事務局として機能している。栄がヨコに広がる街であることの認識を高め、栄に来て1か所にしか行かない直線行動を平面行動、いわゆる回遊に変えて、図らずもアートに出会うことを演出しようとしている。回遊といっても4か所も5か所も寄らなくてもよく、プラス1か所寄るだけで、人の行動は2倍になる皮算用である。

梶田委員

音の問題は大学も同じく、近隣住民との間でせめぎ合いが生じるもの。大学はまだ菓子折り持参でご近所回りすればある程度許容してもらえるが、新たな劇場のように周囲に住民・来訪者・通行人・企業等があるので、その施設が地域に如何に受け入れてもらえるか、ターゲットをどこに絞るのかも重要。テナントに分かりやすいメリットが伝わるような施設づくり、設計も今後の課題である。

福島座長

旧ボストン美術館との連携すなわち金山駅南北の連携、美術とアートの連携にむけ、両者を結ぶような機能や仕掛けを考え、相乗効果があるまちづくりを行うことが必要。

林委員

「久屋ぐるっとアート」のように、共通テーマを設定して、活動主体がそれぞれ企画を実行するというやり方はある。関連して東急 Bunkamura 対象に視察調査を行ったが、時間芸術と空間芸術、また商業施設と美術館・劇場間の人の流動は思ったほどなく、各施設それぞれの利用者が集まっているとのこと。この点を踏まえてさらに工夫が必要であろう。例えば色彩(クリスマスカラーなど)や季節行事(ハロウィーンなど)などのテーマを設けて一体感を創出する。協調しやすいテーマがあると連携も取り組みやすくなる。

福島座長

デジタルアートイベント…例えばプロジェクションマッピングと劇場でのパフォーミングアートとの連携など、伝統的な文化芸術と新しく誰もが楽しめる文化芸術をうまく結び付けることも考えてほしい。

勝又委員

ホールの目指す姿(p.30)では表現しづらい要素だが、昨今高い評価を得ているホールにはオープンスペースに余裕があるものが多い。建設費の高騰が頭打ちしない状況なので、施設面積は削るものは削り効率的に施設計画を考えてほしい。またそれが実現できるような発注方式や民間活力を導入するならば要求水準の内容を検討してほしい。

遠藤委員

作るならいいものを作ってほしい。こういった会議での発言は1/100しか聞き入れてもらえないことが多いが、名古屋市としてよく検討し市民等が集う施設としてほしい。

林委員

2050年には人口が1億を切り潜在的な需要が先細りするということも考えながら、クリエイティブ産業振興を検討していく必要がある。繰り返しの発言となるが、すでに名古屋市に蓄積された知見をもとに、クリエイティブ産業における人材のグランドデザインを上位計画である文化芸術推進計画の中で謳っていく必要がある。

梶田委員

若者やアーティスト等にも、市民会館建替えの検討状況等が伝わるような広報や周知とともに、アーティストなど関係する人全員が建替えを自分事としてとらえられるような仕掛けや工夫も併せて検討をお願いしたい。

福島座長

建替えは 50 年に 1 度しかない。名古屋市の大きな文化芸術拠点であることを踏まえて、しっかりしたよい施設を作ってほしい。

事務局（大島）

文化芸術の進展が新たな価値を創出し、それが文化芸術にも帰結するという考えに沿って、名古屋の都市力を上げるための文化芸術施策を検討し「文化芸術基本条例」を作成中である。市民会館建替えはその重要な要素の一つであり、本日議論に上がったように、施設も財源もきちんと適正に絞り込んで計画していきたい。

次回懇談会では、基本計画案をもとに議論していきたい。またその中で整備手法・運営手法についても引き続き議論していきたい。

名古屋市新たな劇場の整備・運営等検討懇談会 出席者名簿

懇談会委員

氏名	役職等
遠藤 けい	サンデーフォークプロモーション(株)コンサート本部長
梶田 美香	名古屋芸術大学芸術学部 教授
勝又 英明	東京都市大学 名誉教授
林 健次郎	愛知県芸術劇場 広報・マーケティング部長
福島 茂	名城大学都市情報学部 教授

五十音順、敬称略

オブザーバー

氏名	役職等
阿部 将志	住宅都市局都市整備部長

事務局

氏名	役職等
佐治 独歩	観光文化交流局長
大島 吉清	観光文化交流局文化歴史まちづくり部長
岡田 孝光	観光文化交流局文化歴史まちづくり部主幹（文化施設に係る企画調整等）
大崎 湖水	観光文化交流局文化歴史まちづくり部主査（文化施設に係る企画調整等）
立花 賢誠	観光文化交流局文化歴史まちづくり部主査（市民会館の整備）